

食べるは生きる

前川 良太

“スカンポって知ってる？そんなアトムっ子しか知らんで” ある日の我が家の食卓での妻との会話です。どうやらその日4歳児クラス担任の妻は散歩に出かけ、これ食べられるでスカンポを取って子どもたちと食べたそうです。私にとっては懐かしい味で、名前を聞くだけであの酸っぱい味を思い出します。そして妻に「食べれるで」と教えたのは一緒に散歩に行っていた同じく元アトムっ子の職員でした。その数日後、今度は5歳児クラスの長男が散歩で採ってきたと、まさにスカンポを引きずって帰ってきたのでした。思い返せば自分たちがアトムっ子だった頃はそんなこと日常でした。スカンポがどんな味が、いつ頃つくしが生えて、どこにあげびの木があるのか全部知っていました。園庭のビワの木はおやつ代わりでした。だからこそ同じ熊取で育った妻がスカンポを知らないことに私も驚いたのでした。(スカンポ=いわゆるイタドリのことです。どう見ても雑草です。道の駅とかで売られているらしいですね。)

またある日のこと、私が5歳児にお邪魔して一緒に散歩に行く日がありました。みわちゃん(川中保育士)は「わらび採りに行こう!」と子どもたちと話していたようでしたが、一番張り切っていたのはどう見てもみわちゃんでした。高田のあぜ道をすんずん進むそうぐみさんは慣れたものです。目的地は一応ありましたが、すんなりたどり着くわけもなくカエルを捕まえたり道を間違えたり、草笛を吹いて文字通り道草食いながらようやく高田の池のほとりへ。あったわ!これがわらびやで!と教えると、子どもの目はすごいもので次々とわらびを見つけます。子どもたちはためらいなく山の中に入っていきます。そしてわらびだけでなくでっかい筍も引っこ抜き、自分たちで担いで帰ってきました。そして次の日、みんなで食べたそうです。なんだか自分の子どもの頃と変わらない光景だと思いながら、古い写真を見ていると、この日あぜ道でしゃがみ込んでいたのとまったく同じ姿勢で、子どもたちと焚火でパンを焼くみわちゃんの写真が見つかって大笑いしたのでした。

最近の子どもたちを見ていると、離乳食もずいぶんのんびりな子も増えたと、咀嚼の苦手な子も増えたと職員たちは実感しています。わざわざ野山に入らなくてもお金を出せば新鮮なものが手に入る時代と反比例して、どんどん食体験が貧しくなっています。これを書いている後ろで「アスパラって木に生えるんじゃないん?」なんて言ってる職員がいます(笑)食べ物をお金で買う毎日には本来身近なはずの食を生活から少し遠ざけてしまうような気がします。だからこそ、一日の大半を過ごす保育園でどんな食の体験が必要かを考えることは、アトムやつばさだからでもなく、みわちゃんだからでもなく、豊かで貧しい時代に子育てをする私たちみんなが考える必要のあることです。



しゃがんだ姿勢までも同じ
何年経っても変わらない風景



25年前